

現在を覆う戦後史の闇に、文学は果敢に挑んでいる

なぜだか、今日の社会不安の元凶が、戦後史を不透明なまま放っておいたことと無関係でないような気がする。

金石範の最近作「海の底から、地の底から」（『群像』一九九九年十一月号）は、「四・三事件」と呼ばれる、一九四八年济州島で起こった凄惨な「白色テロ」の爪痕を、現代に生きる在日の懊悩として捉えている。

作家自身を模した主人公金尚は济州島で開催された四・三事件五十周年記念国際学術大会に参加する過程で、济州島で島民虐殺が行われたときに、虐殺された島民を埋めさせられるという悲惨な体験を持つハン老人と再会した。

金尚は、韓国安全企画部の妨害があつてなかなか韓国入国ができないが、最終日にやっと会場に到着して参加者の歓迎を受けたあと、「四・三」当時人々が埋められたチヨントル村があったあたりの空港周囲を散策する。金は「四・三」の証言を聞き、深い思いに浸りながら、漢拏山へ向かう。漢拏山登山口の靈室コシムというところで金尚は、ハン老人の幻覚を見た。「四・三」の重い痛みを抱えたハン老人は日本で投身自殺していた。

民族の悲劇を抱える個人。作家の視線は、民族史を俯瞰しつつ、在日する個人の心痛を凝視する。

戦後史に照明をあてる文学作品は韓国でもどんどん出てきている。趙廷來の長編『太白山脈』全十巻の翻訳出版が始まり、いくらか話題になっている。一九四八年十月に麗水市駐屯の韓国軍第十四連隊が反乱を起こし、麗水市・順天市一帯を占拠して解放区にした歴史的事件を背景に、筏橋<sup>ボルキョ</sup>という町を舞台に左翼勢力と戒嚴軍、農民たちや町の人々と地主や有力者たちなど、さまざまな群像を歴史の中に浮き立たせている。

この歴史的な大事件は、金石範が大作『火山島』で描いた済州島四・三民衆蜂起に呼応したもので、「四・三事件」とともに、最近まで語ること自体が韓国では禁忌とされていた。この左翼勢力の大規模な攻勢は、歴史的には、済州島同様、米軍と李承晩政権による大規模な鎮圧作戦によって敗退し、李承晩による肅軍と専制を許すことになる。戦後東アジアに共通する一連の「白色テロリズムによる冷戦体制構築」の一環として捉えることのできる事件なのである。

『太白山脈』を読んだ作家柳美里は、昨年『すばる』十二月号誌上の川村湊との対談で、私の祖父や祖父の弟のイメージを重ねてしまふところがあって、平静には読めませんでした……祖父の弟は共産主義運動にかかわって射殺されたということが、二年くらい前、韓国に行つてわかりました。と語っている。在日朝鮮人の血脈をたどつたところには、多くの場合、済州島四・

三事件や麗水反乱軍事件と何らかの関わりがある。

在日韓国朝鮮人のひとりひとりが、なぜ自分はここにいるんだという疑問から逃れられずにいて、その疑問に密接にかかわっていると思うんです。

柳美里の感慨は、金石範が「海の底から、地の底から」を書いた根拠と似ている。柳美里といえば、「家族」をはじめ近代的・民族的価値観を否定する作家であった。「在日」としてのアイデンティティに依らないことを意識した作家であった。

彼女を突き動かす力は、動物的生命力である。最近柳美里は『週刊ポスト』に「渾身の同時進行私記」と醜聞を煽るコピーを貼られた連載をしている。題して「命」だ。妻のいるテレビ局の報道マンの子どもを妊娠し、その男との愛憎を丹念に描きながら、かつて十年暮らした東京キックドブラザーズの主催者東由多加の癌との戦いとも付き合っていくというものだ。文学的関心よりゴシップ的な興味をひいているらしいが、なかなかの力作だ。そうした作家が、今、韓国戦後史の闇を見据えようとしている。『すばる』の対談は、九月二十八日と記されているので、このとき柳美里はすでに妊娠六ヶ月を過ぎ、東由多加の面倒を見るため引越して同居始めた直後だった。柳美里は、六ヶ月のお腹と、癌患者を抱えて、『太白山脈』を論じたのだ。心に余裕があっ

たわけではなく、むしろ切羽詰まった精神状態だっただろうことは想像がつく。実は、追いつめられた柳美里の言葉には、真実があり文学がある。

柳美里の場合、巫堂（ムーダン）のような作家だということができる。シャーマンなのだ。自分を追いつめたところから作品を生み出す。『太白山脈』に登場する若い巫堂素花が拷問を受け、流産した血の海の中に崩れる異様な生命力の籠もった姿とどこか重なる。

母がなぜここへ来たのか、私なぜここにいるのか。このことは是非書かなくてはと思つていきます。と語る言葉の重さを、彼女は感じていないに違いない。そして、プレッシャーが大きければ大きいほど、また攻撃されれば攻撃されるほど、「恨」の作家柳美里のキーボードは冴える。

戦後東アジアの冷戦体制を支えた、戦後史の暗黒が解読されつつある。文学は教科書の裡に隠された現代史を解明しつつあるようだ。

（『文学時評』第一四四号 二〇〇〇年二月二十五日）